





其如俳諧ハ哉言小似々好古多のこゝは昔思
 也の誠有る而その情己の胸中より吐れ
 其の也故は昔思妙思と云ふは其の
 思とありとけ昔よりしては魚一宗其思
 飛花落葉と云ふも如字相と云ふも春
 秋の流行は有る猶愛の相と云ふは其の
 葉一後句と云ふ風賦比興雅頌の六義と云ふ
 六乃猶過の事と云ふは其の事と云ふは
 なる事新古今小の理世接氏之の微賞心樂事
 之電濫者之只此道よんも世人を河のうらま

あつるも生老病死の心所親し山海草木
のあつるもととく天地小和合しと人氏あ和
ま海の心りいさかも無道人のゆいけいさ
ふも如くさ民もあつるゆいさ海魚さ
又經信卿ハ和の徳道の役善持とさ
及とのあつる和の採も汲水と経行俳諧ハ
口称一遍のさつる落ま一回——谷門のさ
ふさつる——さつる一句もさつる——さつる——
おは海にさつる志のあつる和のさつるさつる
解——さつる——さつるさつる義とさつるさつる門合

いさあ人衆句と出さつる海と教もさつる愚か海甲の
句世のあつるさつるもさつるあつるさつる思ひさつる地
つよさつる海にさつるあつるさつるさつるさつるさつる
さつるさつるさつる——

風
此のさつるさつるさつるさつるさつるさつる
さつるさつるさつるさつるさつるさつるさつる

既の下う海も構乃白い之邦 雲阿

育つるも海にさつるさつるさつるさつるさつる 今

是ハ本經寺佛の法下向の解
此同其人よさつるさつるさつるさつる
是ハ人ハ信へて曰さつるさつるさつるさつる
かさつるさつるさつるさつるさつるさつるさつる

凡そ其の思ふ所は多う染ありは其の能く考ふ

賦

今其の思ふ所は多う染ありは其の能く考ふ
行ふ所は其の思ふ所は多う染ありは其の能く考ふ
其の思ふ所は其の思ふ所は多う染ありは其の能く考ふ

有るけの陸啼 兼や 暈 全

名月や赤い傍と 餘る日本の圖 全

其の思ふ所は其の思ふ所は多う染ありは其の能く考ふ
其の思ふ所は其の思ふ所は多う染ありは其の能く考ふ

比

其の思ふ所は其の思ふ所は多う染ありは其の能く考ふ
其の思ふ所は其の思ふ所は多う染ありは其の能く考ふ

枯葉よ細い出しをる 如蝶ふら 全

雨をらと志と見る由乃 暑の拂 全

其の思ふ所は其の思ふ所は多う染ありは其の能く考ふ
其の思ふ所は其の思ふ所は多う染ありは其の能く考ふ

魚

其の思ふ所は其の思ふ所は多う染ありは其の能く考ふ
其の思ふ所は其の思ふ所は多う染ありは其の能く考ふ

きつたえし 笠のけしや 綿の花 全

山雀や木の 尻のせし 籠 全

其の思ふ所は其の思ふ所は多う染ありは其の能く考ふ
其の思ふ所は其の思ふ所は多う染ありは其の能く考ふ

雅

其の思ふ所は其の思ふ所は多う染ありは其の能く考ふ
其の思ふ所は其の思ふ所は多う染ありは其の能く考ふ

やー 一ッあふし 出しと 木の葉 全

月乃秋森 是も垣よ成より

全

けりるの句はみまきふく座の白きるこけりたるのこ
又そのしるしの秋も垣よ海原もよこけりたるのこ
ぬけなき詞少く云々こけりたるのこ
けりたるのこけりたるのこ

頌

いはいを詩よ云頌は美盛徳形容而告神也
とあり又頌は補讃之義也いはいはむすむ
宗祇の云客之誦之客ハ王者の盛徳と云々
せりて客をさし誦はむすむいはいはむすむ

湯治天満宮(も納)

香尔 満りきぬハ天下の梅如主 今

大和香尔を神四月朔日四向渡りて由阿麻の節も納

智よ じよ じよ 戸帳や神乃文衣 今

和歌の云義ハ毛詩より出く連能よ傳へ来たる言志の
ふるさとの心けりたる言志を教ふの言志は海とす
なりてんけりたる言志を教ふの言志は海とす

歌 僊 獨 吟

風流觀

楓橋

初一やささ踏もんぬ田向町里
春のこころと馬士の馬の株
養月空月廣くは陰晴く
飢の湯氣如立のほろり
衣のかりと衣の層板出
ほろりて埃の卵を掃く塵

棟梁は襟の飾もよく言ひ也
りふらゝ高はくもゆに仲人
干揚く踏ふと日飾も昼時介
竈へとも繕ふハ字も好ぬ者
帘下戸もよく句は世之を
りもくぬ種ハハおは種
唐細小のしらせも少親者
吹くハ風の迹も好
巻帛のら修布安も蓋の上
ぐ~~~~とさ 鏡月障

花はほいほい多きハ
素直もやハ生も好く
此類ハ利もよく流行種
ハハと名も好く同ハ故御
留主もよハ日も好く
服は向のともせ保もぬ振
袖口も届けぬハの意好
三ハと好ハハ邪ハハ
桑の好もハハハハ
戸は好くハハハハ

籠うけ、波のうへに、場所を塞ぎ
放しきじ、乃何ぞ種とて
伸け、乃何ぞ種とて、今何ぞ種とて
望み、乃何ぞ種とて、踏こころ
うれ、も又何ぞ種とて、今何ぞ種とて
言ふ、とつと、酒のあはれ
思ふ、の懐く、痛く、言ふ、今何ぞ種とて
分、ふ、ら、何ぞ種とて、今何ぞ種とて
静、さ、何ぞ種とて、今何ぞ種とて
派、生、の、ま、く、何ぞ種とて、今何ぞ種とて

歌仙獨吟

仁美觀

里郷

の、美、清、香、流、也、正、よ、茶、の、水
年、く、葉、く、松、枝、の、月
折、碁、い、と、く、旅、小、市、中、小
酒、さ、く、出、子、さ、無、洗、講、也
何、事、も、甚、と、冬、と、く、物、さ、く、に
四、角、小、積、香、夢、清、物、の、名

からくして大僧正の骨と皮
顔より下曲筆の達人
々々々も何可や奈良法部
うかしの悪。身も下法句
腰抱の手しらあはれ目出夜ら
湯さの海く莫途の友
森受と海老の山口園由也
月小教乃るつふな繁
如呂吹く松原もよふ方の若
誰。せはれと社酒取傳

禁制の花小 久中も曲り歌
聖の古く話よか句よ来の日
雛立く雅き時新物語
地生乃 縁の 聖、素音
居濱よ嬉しく小春の樓舟
可くは修とあしぬ橋新若
くくぬ身よ孝行は目小立
作らるる文王の民
松原も紫園のち一枝あり
のひびくく来る時の月

侍るる御頃も情まぬ時鳥
 才の氣母能氣父有る女
 何そりそ月本たて有神の物
 うたはと 爲如和しくよ吹
 鶴音小葉山子と見る波し書
 瓦やくまの 冒し橋
 福臨 春のうへ乃都之
 前人 詩人の癖もさうく
 咲草いふ所咲をともは花の印戸
 波しは。ふるらやうの海

三の仙

千早振神やさり者人ほくう
 ちと響の坂もこゝ思屋あり

白報法嘉の志と望や去法秋 賀光
 ちとせの坂も越へ人葉の者 機管
 二日三日月小もふわ、やましく 鶯谷
 孝の 窓しきも曇ふ分 義秋
 羽身うとちき惜しき人言法庭 棧
 翔の小しき法橋の硝子 考
 馬乃尾もこちと差と也 哉

初瀬のしらも裡小きわらひ
 釣の月下祿直達のつとくしき
 角力整の繕も大名
 祢者、蛇七ハ水も即ちり里
 釋多の娘は眉は初その歌
 松子ハ竹枝初の音やん
 竿丈さむい法惠比須の宮
 天地のす糸小も笑はかくも
 川のまゝなりあつて海亀

哉 哉 哉 哉 哉 哉 哉 哉

歌仙

公菊や秋も貞の文と續
 秋一酒とえく返一顔
 漸寒く衣掛家小月文く
 工夫取投く海初恵の編
 初旅の支度取多小歌の袖
 いとく剛は踏水さる 猫
 風紙余ふは歩をた不二の語
 初字の禮へち里續る 埃

海門 旭唐 籟旭 旭唐 旭唐 旭唐 旭唐 唐

善くも庭の廣る達戸歌
 學者の玄冥と山師とと
 以て主のゆかりを尋ねの
 短冊の利く九章の意
 蟻望のうらまを白牡丹
 桐蔭の拾ふト苦の口
 茶の徳く驚遠なる唐の
 流るるもわが物も門を
 人の氣のまをたうせ、月と
 不焼の似るま鏡の色

旭 唐 門 旭 唐 門 旭 唐 門 旭 唐 門 旭 唐 門 旭

東帝の訪義の門を讓
 錫也も祝く響入の馬
 如くひと官ふ合をる指
 吳腹屋廊の生思の七
 祇園會の江戸の屋敷
 家もそのとと高星のさ
 眠る倦欠ひかへる草履
 血氣の流るる名階の門
 向ひ湯子も出る湯也も
 多しなぬ伽羅河はまの

旭 唐 門 旭 唐 門 旭 唐 門 旭 唐 門 旭 唐 門 旭

おうけ八景 後河原小菫の月
 清きよきと船の手書里 唐
 神波の藤原の巾箱 瀧凍殿
 晴天の帆は白色に見ゆ 旭
 竹きぬき中子振込伊達屋冬 門
 蝶の摺紙の音ももせに 磨
 南枝より望み出さる神の花 旭
 八重 山吹の妻 御記 父 執毫

歌 僊 獨 吟
 春風樓
 和水

武藝並小名阿る尾花や雪の眉
 方八百 里公浪乃 露
 夢のよきハ家 家よ 餘る月と 垣
 下の 水が 高人 新声
 川つゝハ糖の目 近し 玉教
 岩阿 屏風よ 答 体じあり

ウ
夜臺も眠くさる 牛笛
新字くくく 市邊の先編
五ッ緒の房よりくく 牛笛角
六波屋丸く 契の上おも
聲原の氣押小家もくく けり
造言 浜人くく 世の居々 浅
邪个分系と涼くく 吾合歌の花
終載くく 書始さくく けり
手寄まいたくく 合口もくく けり
惜りのよみ 拾人本くく けり

花の留も 昼の月下 けり けり
馬乃 鹿 齧 小田の 苗代
藪入る 不自由 けり けり 合小 けり
く 海より ぬ人も 惜む 挽糸
福倉の 初瀬 古瀬 顔入 場也 けり
子 寄も けり けり けり けり けり
銚 録の 骨も けり けり けり けり
い けり けり 墨の 句も けり けり
電 拂の 詞も けり けり けり けり
障子 小 舞 けり 舞 表 舞 表 長

奥の間に吉次、行掛積り行
多しも多に傾成とど
来金紀青立約月よ乳おれ
神よりけりや珍虫のええ
菊兆りん姑婆の名とぞく
そくそく叶いぬト善の口
場錦よ大入道の恥とぞめ
牛の部、位ある屋根青
凱凍ハ汚かゝも 嘉衣
生如命よ〜 齡永き日

歌僊獨吟

硯壽觀

湖月

六根ハ子代のやと里と茶法露
実教門田の水も清浄
月人々人の〜あじき遠く
東と〜枕入〜交達
並松子水拍き〜雨の如
中細ひの弱乃乳と考ひ行
造管よ一里 あり自由や
世如智恵は夜少と有き如

糖ふも都が世を尚親よき
け涼——うた何また人
ふ古せめく下韻の水空とも
武士の影じよ味分ふ無垢
踊の舞ふよ角トもふ繁る
月小むりりく十年の事
初はよ海とる癖のいとしさ
惜おと是のまじ木の湯
花はら野吉坐、まよ小まけり
ふの歌の治法年酒小酔小

21
新先もけ先も留雪まゝの色
大孝辰々改えのふき
豊年法貞と名け、まよふ
か——う記御代も悲とらせお
重忠よ惚れぬ世のおまね
隣梅袋も一寄南 徳り
為車の牡丹唐草舞相少
あも部よ子法菓子、減る
名のみ孝も後と皆(る)詔書寺
是来よ管へらりて手ぬらひ

鶴の月角カ始々散れらうし
麋鹿の 枝子梅の枝まよ
大根も秋ハ味も小粒も寸
かくまひ君の けく精進
有ハハハ馬ハハハ縁をさ
枕の女乃子弱不元氣
是ハハハ花の 盛と雲如色
ま日ハハハやく雪の 頂さ

歌仙獨吟

白濤觀

砂明

復菊子子年の 露を末永一
時ト あハハハ乃 陰も瘧瘧
花ハハハハハ出 雲の輪四けく
一 葉 泊ハ 旅ハ 吸ハ
万 仞の 叢乃 肩ハ 玉 龜
濼の 志里も 秋を 此ハ 可 秋
幕ハ 此ハ 少ハ 大 年ハ 可 是 此 此
作 筆 一 川 祿 宜ハ 目 送

足来分るるの廿二人
乃皇立ありし一糸の扇根
觸録と潜く遠入るるを以
来れ糸隠しのさくくと名
流の師乃皇立のふりりり
と流分替女のとやる六波羅
并々地よめのぬ 因西
世々まゝのま 春の雲月
探集の氣と精も花の
平生の雲も花の

折リくの書との書の書
雲の小舟の手紙の書
意氣ハ時句記里の種の書
糸 漬 喰も ぬハ二布の書
書通のふハ氣の書
批訂をても 因性の書
香の圖乃批小名の書
敷多の書 後三帝
多物ハの書 口を明
孔雀を立の書

虫宿そのの葉山と竹の月
 危の敷も新やあゝ露
 打向の免倉小の角力取
 松よむの都の四つや
 花合取瓦焼の味も海舟祭
 苞のれも枝葉其帆
 智恵人といふうや花高雲
 又若うん子空をく糸好子

歌仙

魚のくハ遊るよ網の極う那
 先ん長宗あつく籍の母子と枕
 集うくあまも眠るハ食飽く
 よく婦とていそいそとちね人
 月の崎垣の高き河跡も袖
 露路途同しやうり百生り
 物多し馬と婿ハ葉根架

听之
 芳竹
 桂旭
 桂十
 芳川
 如竹
 吾山

店屋々々々々一腰もまめ
 手のよい紙知々四十の書定、
 生まかひ々々々々々々々々
 冬枯り薄輪洋廣く月の
 千社まの里の袖り粒沙
 草鞋と左衣は物とかい曲里
 脊出と歩歩ハ名の高い器者
 ぬ持々帯のま々々々々々々
 春公先ハ諸如化務田
 さねハ々々花のお江戸を橋々々

听 川 芳 十 山 如 桂 听 十 芳

十
 貫ハぬ人近離市の埃
 簾の面々如可々々々々々
 氣指出は是如佛檀
 光陰の海りま々々九十九髪
 髪と合々々々三席と如々
 新々器と同く種々如官所
 うまハの水と寸々々々々々
 包まねハと々々々銀も落歩如
 馬麻の瘡治り々々々々々々
 二のち々々理屈ハつ々々々々

川 听 如 十 桂 川 山 十 芳 如

浦の管屋紙吹くを毛
 石草よ水と乞はくや月出く
 桐葉の秋と臭河下しよ物
 踊子りえ後しりよ名有る
 袖川さ裾引さところ由國元
 々々々々々々々々々々々々々々
 皆既の儘よ休む屋根背
 花も口明くは裾の云合せ
 亭よ浮舟舟ようし壽
 靴筆
 山如桂川芳山桂听

春

永日とつてはくはしきる
 客少し梅をそよばくはくは
 人多や馬、離れく山さく
 水底の世の教汲じ小船りか
 蹄ゆる友達りけく柵りか
 小山一高乃くくくや散ら極
 後少くや百指のあきやく
 意持少君の梅姫やむの山
 履少くは枕や己の日結く心
 楓橋
 里郎
 白藏
 山橋
 三河
 東去
 海門
 籟旭
 沾山

野とてふ分若るくのとてれま
分とてぬ言ははる花見う分
湯とて新とて新はは胡蝶とて
雲とてとて白とて桃の義
山も川も埋りてをのさかす
作保那の元目とて出せ桃の花
雲の雲とてはは山
初とてとて海の水乃沖の石
白とてとてとて海の橋
勝とてとてとて桂乃船とて

岱貝
吾山
石鯨
亀推
可也
吾躬
湖月
和水
沾戸
五連

紅白の花を落葉や新あらし
以水とて新とて新とて
嘗小原とてとて唐の葉肉とて
子とてとてとてとて稚子の声
勝とて秋の音や酒戸の石
神代小とて新とてとて岩脚端
八景の和乃新とてとてのほと

夏

霧化とてとてとてとてとて
蕨とて一針とて新とてとてとて

谷梁
喰焦
伴杖
芳竹
砥明
扑路
沾紋
楓橋
沾紋

なう〜く 籾のい乃ちや 初糶
 改ちうちや 今更を〜向谷の落
 渡も〜向御 祕落あう〜牡丹分
 再火の公ようらさ 船舟、那
 亀よ酒のませ〜船に凍の那
 水う〜や 其も船舟 隻木立
 門涼う〜三二取候 上野、那
 浴〜くり〜一 懸ハか〜一 庭涼〜
 六月の後、口、江、尾、石、海、流、水、石
 蝉時雨衣りせ 山、奈、何、よ、の、
 可也

虫干や室よ〜く 向奈良の寺
 分別のあふなく〜く 涼う分
 五月、雨、や、拖、り、し、く、船、楫
 六月、雨、や、肉、く、田、唄、の、手、く、船、の
 葵咲はと 船を、や、至、巨、魁
 登根舟の 着、よ、と、向、の、堂、う、向
 卯花、干、ま、記、り、船、を、く、く、船、を、
 小、船、又、く、戸、ま、ぬ、着、船、涼、日
 高、一、口、薯、よ、く、ぬ、暑、の、那
 牡丹、く、く、く、船、を、ま、の、む、あ、く、
 沾山
 其、賜
 茅、竹
 南、霞
 靴、甲
 湖、月
 紀、水
 砥、明
 沾、戸
 沾、涼

五ノ面やうらね松の管絃條
花縣
夕立や戸を建廻く日如白の
木丹
傾城の涼ち初とうゆるぬる
扑路

秋

子種咲らう新玉のう夜は
楓橋
紅葉の秋を教る庭乃面
沾絃
面一夜乱る萩や手枕並
石籟
雨わらう礎うけく海士の若
さゆか
葉内と増は海のする紅葉が
白籟
紅葉や松ハ雪者と尺く雨
籟旭

帝麻や壁よその香けをへく後
上毛西牧
舟山
柴橋よ縁る若けふしきう分
南牧
一艸
葉何回のことくせ歩け蘆菔の那
崇宇
又天くハ穀の吹よ角力とう
沾山
神ノや澄村よ見甲のさのさ白
南霞
相の善や秋の封切る如の言
龍旭
系鶴野花も及るぬ日さうる
湖月
体かささ々鶴を秋又桐一葉
和水
葉初とさ山ハもかも若よの月
其躬
朝ふくは深入るる
砧の声
砧明

汗流の奥と宿人 葉の酒

沾戸

々物ま〜初と思ふ礎る

津富

月々宵小町ハ酒もほ〜ぬ

乙維

長明ハ唐漕も人月々看

眠牛

九九節九の字の曲供く徳とくとくとくきくきく九献く

唸魚

落々日や 糸雨を垂れ袖の照

拵路

秋波や 底よ志川ちる声の声

昔山

冬

音阿〜ハ響人と思ふお娘が

楓橋

花よな〜く響ハうるほ〜小娘さる

白藏

水仙はち〜くや身清冬結菊

山橋

榴〜く響もあ〜る人 神教

沾紗

立枯の葉小〜けが〜赤の花

沾戸

葉の舞ハ〜く〜

拵路

神名法も極響東や作の音

其躬

赤梅や音の鳴〜く響あ〜く

南霞

村手鳥里を 送る舟東波ハ

湖月

芦笛より氷とあ〜く鳴の海

和水

岸より日雲も脚傳や 浮船山

沾山

岸より日雲も脚傳や 浮船山

沾山

海晴一色や 敷の星月夜
風や来りし砂のかげ川糸
青葉の葉先は 忍ぶるを所か
舟と目定ぬき けりき痛し

年賀 四季混雜

松ハ香楸の 秋と為難
為難まをいし けりし知事
白葉や 己の名遊く 郷に杖
上壽め 流と満や 葉の水
心も杖に けりし 齡子

室馬 素外 吾山 芳竹 楓橋 梅郊 梅壽 里 女 翠旭

松よ少長 齡めてく 六の花
葉も葉も 若葉と 六十の秋
積りし 辰年々 六浦の花袋
若舟小ち けぬき 宿の志分可
ふ生りや 昔葉書も 不六十
必よ杖九十九も けりし 杖結書
ふ代ととの 松ふ 杖結書 若知事
おと 月年 けりし 杖結書
やせぬや 旭と 三保の 松の 書
そく 六十年の よけ 八重産

沾紗 泰旭 氷壺 海春 沾戸 蓮旭 歳秋 魚光 其躬 瀬布

百年の乃も燈ぬ一草

賀光

目出夜まや跡は杖つく菴子

機若

あまや実秋も若木の松の色

鴛谷

老糸や頂ふ年一汲り在

義秋

六十の坂や春初の花つゝ

南霞

多作は肩ぬ舞ひや子存落

風潮

六十年の口わしはし子存秋

宇長

子代追と清合ふ葉や日の身

海鷲

年毎ふやせぬ葉の小ほいゝ南

薰枝

汲人の長壽はくゝゝゝゝ

海樹

と年六十と契く何處も欠るつゞくと

山雀は肩にほひはく六十圖

山橋

八百ふとせ齡まのよは草

桂波

子年ふとせゝ雛雀と六十の秋

沢江

子代吹や耳小頂ふ年の妻

祇考

百ふとせはのち安一葉は

文十

指して候子安苗志先くは菴子

後索

六十年のう子代とまのく菴子

鷗丈

松名松若くはアツり立田船

籟旭

作齋曆はせぬものや富士の者

舎育

枯くゝ後百まやまき葉

亀遊

壽と彭祖より久し 菊は秋

着飾りや襟あけてかき着る草

松の枝は旭や子代と秋の色

雲の海渡六旬の壽のついでに 毒りしも室をくもぬ旭の分

あふれをせぬ人のまゝに

老せしや六十年熟し霞山

多にあや耳は鳴りし海もあふ

橘の花は恙やくむくりに

六十の能見くやまじは菊

郷は枝はく松枝や千に秋

文兆

東鯉

可也

丑風

楚朝

隆里

松翁

旭英

菊成

梨道

菊の酒はさしけりよは旭の枝

色くくまきし川松の丈夫く分

四季の肉は杉千秋や糸は種

八束穂の急度清身小田面

獅は枝はくも何違ふる名系が

くく菊はへ葉も子本の齡水

不考のの葉を室は市有ると

色くへぬ松を子と勝は葉が

七重八重六十字ハ葉の蒼水

色くく子秋木の葉の酒

自由

成美

桂舎

水鶴

旭堂

柏筒

李潤

和水

百羽

佳十

六十の秋やぬ家の這入口

渡十

丈夫さよ水とくく春の簞

夏延

新く河の老木かろく如る系が

旭人

葉は系尔墨色若く一六拾

辰維

竜人多くの身年順の字と尋く
四季の白く了りあふの四字と如く

一板ゆく和く来如拵い

春湖亭

旭磨

唄ももも搦小田極の松子ど

今

海系や塵もも然乃初小松

今

表板くく旭や 大丈夫

今

老せぬやあ便世よ若も少く久く松の字は
下りも後い一と与二一字アこそく

如鏡歌

餅山

善老の澁糸くまぬ松の春

今

善笠よ雀も助り田極耐

今

如東秋の恵も深く伊海の海

今

雙はまこやうるはいつまてもく
後いしぬ

第とわく文字の垂布稻の秋

湖十

根つと河尺くや古浦の松は若

吉門

耳の極さぬく若く部云

春堂

句大工の試じ若や年六十

為裘

若や年よ是の月日星

冬涉

柳橋の意とやあまき

化しうらふ庭じとあまのそまの松

初海名枝や子年の石の林

十のうりの半はるそく花の至

そく分事や六義の奇如敷

出来結や六十余石版つと

連翹や五の節六節花盛

節毎ふ鈴極うや弁の美

六つうら尾も長記や和田海

菟草 秘密の山の若元

六十若くも屋敷の巻れねむい

歩月

犬養

一漁

晋阿

長隱

万英

祇小

聖女

奥目

龜旭

かろくは八百のそ香を園の菊

八重梅はまの奥ふくく六の花

壽や六浦の松のトと

八重穂も尺屋く六浦の結乃風

○

さ川香や子代はまの耳果報

香身よなりく誠の子も

幾代もそくぬ六浦の楓

月影もそく六田のそく

郷よはくそく梅えの旭の枝

瀾舟

羅帳

芥蔵

丈山

沾山

谷貝

石鯨

風導

子鷹

六十若くは榮枯名所歌

苦竹

竹遊少く見く不老の華燈

昔山

夫夢やそせぬ新姑六十圖

扑路

花々ぬ河くや是も千代ん草

紫鳳

御名の一字小彭祖

八百年も巻くんと愛よおん亭

よほこいれは雲河わさかき

千種の小れ様や六の窓

菊壽

四季

恩電よ毎番 澄るし身く柳

紫鳳

雲とくく取止くく 郭公

生涯の費くぬおん草の月

新梅や未と鶯も只の春

年賀

歳妻も丈夫よまき色燈の杖

紫阿

除くさよもむくくち松の丸額

中河津を齡いの敷や不合の花

伴我

又まくあねや六十一の美

艶甲

新母一や六十年の月如者
名の中よきものや松一本

龍旭
尔耕

奉賀

和田海旭師六十之

小原

瓊樓聞鶴唳
珍膳會僊時
壽宴期千歳
詞華照玉危

滕信親拜

吉
茶
丈


